

田中萬年編著

「仕事を学ぶ－自己を確立するために－」

埼玉県立川口高等技術専門校 新井 洋一

私は昨年度まで埼玉県立中央高等技術専門校の校長として微力ではありますが職業能力開発の推進に携わっておりました。最近手にした職業能力開発に関する書籍のなかで表題が「仕事を学ぶ」という特徴ある一冊がありましたので、ご紹介したいと思います。

本書の内容に触れる前に、当県の職業能力開発の現状について少し述べさせていただきます。

当県も長引く景気低迷の影響を受け、財政事情は年々悪化し、聖域を設けない予算削減や事業見直しが避けられない状況となり、職業能力開発行政も大きな転換期を迎えました。

昨年度までの12校体制から本年度は10校体制へ、さらに17年度からは7校1分校への整理統合が進行中です。施設の整理統合に伴い各校の設置科目も見直され、前任地の「中央高等技術専門校」は平成16年度から「ものづくり」を基調とした技術の高度化に対応できる人材の育成を図るため、既設の全科目を廃止したうえで機械系、建築施工系、設備施工系、電気電子系の4科目を新設する大幅な変更がありました。新設された科目はすべて訓練期間2年の課程としてスタートしたところです。

各科目の仕上がり像で共通していることは、「ものづくり」における応用力を身につけた人材を育成することにあります。このため、2年間のカリキュラムの中に基礎学科として国際理解のための「外国語」や「ものづくり」に欠かすことができない「創造性開発」の時間を設けたほか、各訓練科目間で定期的に交流授業を実施することやインターンシップの導

入、卒業制作、卒業研究等を盛り込みました。

職業能力開発短期大学の基準の枠にとらわれない全科目高卒2年課程の訓練を施設全体として調和のとれた形で進めるためにはなんといっても担当する職員の意識改革が求められることは申すまでもないことですが、訓練生に対して「学ぶ」、「訓練を受ける」ということの動機づけや意欲の喚起が今まで以上に必要になると考えられます。

このための指導は「どの時期に」、「だれが」、「どの場で」、「どのよう」、「どのくらいの時間」、「どん



な資料・教材を使って」等のステップを決めて実施していくことが重要と思います。

平成15年度は廃止する科目の備品を含めた教材の保管転換や廃棄手続きおよび新設となる科目の機器等の受け入れ、実習場などの改修等を進めながら訓練を行うことになりましたので多忙を極め、残念ながら新たな2年課程の訓練生を迎える準備や導入計画を十分整えることができない状況で平成16年度を迎えることとなりました。

私が本書に出会ったのは新年度になっての6月初旬でしたが、読み進めるうちに「どんな資料・教材を使って」の項目に活用できる教材（教科書）との思いを強く持ちました。内容は入校した生徒が「テクニシャン」になるために、「何をどのような気持ちで学べばよいのか」をわかりやすい表現や事例でまとめられています。

本書は若年層の「技能離れ」が進んでいる現在にあって、その潮流に逆らう職業分野を選択した生徒1人ひとりが「仕事を学ぶ」を訓練教材としての効果は、職業能力開発の歴史や意義を体系的に確認でき、自分たちが恵まれた環境の中で学んでいることの認識や各国の職業教育制度も比較して理解できること。「職業訓練を受ける」ということに対する多少の「負い目」や「不安感」は修了生の数多くのコメント等で完全に払拭され、「学ぶ」ことへの確信が持てるようになること。先輩各人の訓練に取り組んだ姿勢や就職先企業での成功事例を通じて自分の将来像やキャリア形成に対するイメージを確立することができることなどがあると思います。

訓練期間が2年というメリットを生かし、入校直後のガイダンスだけでなく、6ヵ月後、1年終業時、2年次スタート直後、就職活動直前等節目節目に本

書内容を学習させ適切な指導をすることにより、訓練生の技能習得意欲や訓練効果が高まるものと確信しております。

ただし、本書はあくまでも雇用・能力開発機構の職業能力開発短期大学校（職能短大）で学ぶ訓練生向けに限定された形でまとめられているため、ゴシック体で書かれている修了生の声や感想などもすべてその範囲に限られています。

各章には質問を設け、職能短大生各人が、自分の考えを整理してもらうようになっていますが、教科書的に使用されることを想定して編集されてはいません。したがって当県や北海道、東北地方に多くみられる校全体が2年課程となっている施設の指導員が教材として用いるには多少の工夫が必要と思われます。

また、本書に訓練生を採用した企業側からの期待感や感想、要望などの事例を紹介し、企業が求める人材とはどのようなものを理解させるページを設ける、起業を促す文面や先輩達の実例を紹介し、起業意欲を高めるなどの内容も組み込んでいただけたならばさらに充実したものになったと思われます。ぜひ改訂版として出版されるときは、県立職能短大や2年課程訓練生の部分も取り入れていただきたいとお願いする次第です。

ものづくりを大切とする伝統や校風は一朝一夕に築けるものではありませんし、年数の経過と共に自然につくられるものでもないと思います。教えや指導があってこそなりたつと考えたとき、適切な教材はなかなか見当たりませんでした。私にとっては遅きに失した感がありますが、本書に出会ったことに感謝しております。

